

地獄変

芥川龍之介

一

堀川の大殿様おほとのさまのやうな方は、これまでは固もよ
り、後の世には恐らく二人とはいらつしやいま
すまい。噂うわさに聞きますと、あの方の御誕生にな
る前には、大威徳明王だいてくとくみやうおうの御姿が御母君おんはつぎみの夢枕に
お立ちになつたとか申す事でございますが、兎と
に角御生かくれつきから、並々の人間とは御違ひに
なつてゐたやうでございます。でございますか
ら、あの方の為なさいました事には、一つとして
私どもの意表に出てゐないものはございませ
ん。早い話が堀川のお邸の御規模を拝見致しま
しても、壮大と申しませうか、豪放と申しませ

うか、到底たうてい私どもの凡慮には及ばない、思ひ切
つた所があるやうでございます。中にはまた、
そこを色々とあげつらつて大殿様の御性行を
始皇帝しくわうていや煬帝やうだいに比べるものもございませうが、そ
れは諺ことわざに云ふ群盲ぐんもうの象を撫なでるやうなものでも
ございませうか。あの方の御思召おおぼしめしは、決してそ
のやうに御自分ばかり、栄耀栄華をなさらうと
申すのではございませぬ。それよりはもつと
下々の事まで御考へになる、云はば天下と共に
樂しむとでも申しさうな、大腹中だいふくちゆうの御器量がご
ざいました。

それでございませうから、二条大宮の百鬼夜行ひやつぎやぎやう
に御遇ひになつても、格別御障おきはりがなかつたの
でございませう。又陸奥みちのくの塩竈しほがまの景色を写した
ので名高いあの東三条の河原院に、夜なく、現
はれると云ふ噂のあつた融とほるの左大臣の霊でさ
へ、大殿様のお叱りを受けては、姿を消したの

に相違ございません。かやうな御威光でござ
いますから、その頃洛中の老若男女が、大殿様
と申しますと、まるで権者の再来のやうに尊み
合ひましたも、決して無理ではございませぬ。
何時ぞや、内の梅花の宴からの御歸りに御車の
牛が放れて、折から通りかゝつた老人に怪我を
させました時でさへ、その老人は手を合せて、
大殿様の牛にかけられた事を難有がつたと申す
事でございます。

さやうな次第でございますから、大殿様御一
代の間には、後々までも語り草になりますやう
な事が、随分沢山にございました。大饗の引出
物に白馬ばかりを三十頭、賜つたこともござい
ますし、長良の橋の橋柱に御寵愛の童を立てた
事もございますし、それから又華陀の術を伝へ
た震旦の僧に、御腿の瘡を御切らせになつた事
もございますし、——一々数へ立てゝ居りまし

ては、とても際限がございません。が、その数
多い御逸事の中でも、今では御家の重宝になつ
て居ります地獄変の屏風の由来程、恐ろしい話
はございますまい。日頃は物に御騒ぎにならな
い大殿様でさへ、あの時ばかりは、流石に御驚
きになつたやうでございました。まして御側に
仕へてゐた私どもが、魂も消えるばかりに思つ
たのは、申し上げるまでもございません。中で
もこの私などは、大殿様にも二十年来御奉公申
して居りましたが、それでさへ、あのやうな凄
じい見物に出遇つた事は、ついぞ又となかつた
位でございます。

しかし、その御話を致しますには、予め先づ、
あの地獄変の屏風を描きました、良秀と申す画
師の事を申し上げて置く必要がございます。

良秀と申しましたら、或は唯今でも猶、あの男の事を覚えていらつしやる方がございませう。その頃絵筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申された位、高名な絵師でございます。あの時の事がございました時には、彼是もう五十の阪さかに、手がとゞいて居りましたらうか。見た所は唯、背の低い、骨と皮ばかりに痩せた、意地の悪さうな老人でございまして。それが大殿様の御邸へ参ります時には、よく丁字染ちやうじぞめの狩衣かりぎぬに揉烏帽子もみろぼうしをかけて居りましたが、人がらは至つて卑しい方で、何故か年よりらしくもなく、唇の目立つて赤いのが、その上に又気味の悪い、如何にも獣めいた心もちを起させたものでございませう。中にはあれは画筆を舐なめるので紅がつくのだなど、申した人も居りましたが、どう云ふものでございませう

か。尤もそれより口の悪い誰彼は、良秀の立居たちゐ振舞ふるまひが猿のやうだとか申しまして、猿秀と云ふ諱名あだなまでつけた事がございました。

いや猿秀と申せば、かやうな御話もございませう。その頃大殿様の御邸には、十五になる良秀の一人娘が、小女房こねうばうに上つて居りましたが、これは又生みの親には似もつかない、愛嬌のある娘こでございました。その上早く女親に別れましてせめるか、思ひやりの深い、年よりはませた、伶俐な生れつきで、年の若いのにも似ず、何かとよく気がつくものでございませうから、御台様みだいさまを始め外の女房たちにも、可愛がられて居たやうでございませう。

すると何かの折に、丹波の国から人馴れた猿を一匹、献上したものがございまして、それに丁度悪戯いたづらさか盛りの若殿様が、良秀と云ふ名を御つけになりました。唯でさへその猿の容子が可笑をか

しい所へ、かやうな名がついたのでございますから、御邸中誰一人笑はないものはございません。それも笑ふばかりならよろしうございます。面白半分に皆のものが、やれ御庭の松に上つたの、やれ曹司ざうしの畳をよごしたのと、その度毎に、良秀々々と呼び立てゝは、兎に角いぢめたがるのでございます。

所が或日の事、前に申しました良秀の娘が、御文を結んだ寒紅梅の枝を持つて、長い御廊下を通りかゝりますと、遠くの遣戸やりどの向うから、例の小猿の良秀が、大方足でも挫くじいたのでございませう、何時ものやうに柱へ駆け上る元氣もなく、跛びつしを引きく、一散に、逃げて参るのでございます。しかもその後からは楚すばえをふり上げた若殿様が「柑子盗人かうじぬすびとめ、待て。待て。」と仰有おつしやりながら、追ひかけていらつしやるのではございませんか。良秀の娘はこれを見ますと、ちよ

いとの間ためらつたやうでございますが、丁度その時逃げて来た猿が、袴の裾にすがりながら、哀れな声を出して啼き立てました——と、急に可哀さうだと思ふ心が、抑へ切れなくなつたのでございませう。片手に梅の枝をかざした儘、片手に紫むらさきの桂けいの袖を軽さうにはらりと開きますと、やさしくその猿を抱き上げて、若殿様の御前に小腰をかゞめながら「恐れながら畜生でございます。どうか御勘弁遊ばしませう」と、涼しい声で申し上げました。

が、若殿様の方は、氣負きおつて駆けてお出でになつた所でございますから、むづかしい御顔をなすつて、二三度御み足を御踏鳴おふみならしになりながら、

「何でかばふ。その猿は柑子盗人だぞ。」

「畜生でございますから、……」

娘はもう一度かう繰返しましたがやがて寂し

さうにほほ笑みますと、

「それに良秀と申しますと、父が御折檻ごせつかんを受けますやうで、どうも唯見では居られませぬ。」と、思ひ切つたやうに申すのでございます。これには流石さすがの若殿様も、我がを御折りになつたのでございませう。

「さうか。父親の命乞いのちいひなら、枉まげて赦ゆるしてとらすとしよう。」

不承無承にかう仰有ると、楚すばえをそこへ御捨てになつて、元いらしつた遣戸の方へ、その儘御歸りになつてしまひました。

三

良秀の娘とこの小猿との仲がよくなつたのは、それからの事でございます。娘は御姫様から頂戴した黄金の鈴を、美しい真紅しんくの紐に下げ

て、それを猿の頭へ懸けてやりますし、猿は又どんな事がございまして、滅多に娘の身のみはりを離れません。或時娘の風邪かぜの心地で、床に就きました時なども、小猿はちやんとその枕もとに坐りこんで、気のせみか心細さうな顔をしながら、頻しきりに爪を噛んで居りました。

かうなると又妙なもので、誰も今までのやうにこの小猿を、いぢめるものはございませぬ。いや、反かへつてだんく可愛がり始めて、しまひには若殿様でさへ、時々柿や栗を投げて御やりになつたばかりか、侍の誰やらがこの猿を足蹴あしげにした時などは、大層御立腹にもなつたさうでございませぬ。その後大殿様がわざく良秀の娘に猿を抱いて、御前へ出るやうと御沙汰になつたのも、この若殿様の御腹立になつた話を、御聞きになつてからだとか申しました。その序ついでに自然と娘の猿を可愛がる所由いはれも御耳にはいつた

のでございませう。

「孝行な奴ぢや。褒めてとらすぞ。」

かやうな御意で、娘はその時、紅くれなゐの柏あこめを御褒美に頂きました。所がこの柏を又見やう見真似に、猿が恭しく押頂きましたので、大殿様の御機嫌は、一入ひとしほよろしかつたさうでございませう。でございませうから、大殿様が良秀の娘を御鼻ひいき眞まになつたのは、全くこの猿を可愛がつた、孝行恩愛の情を御賞美なすつたので、決して世間で兎や角申しますやうに、色を御好みになつた訳ではございませぬ。尤もかやうな噂の立ちました起りも、無理のない所がございませぬが、それは又後になつて、ゆつくり御話し致しませう。こゝでは唯大殿様が、如何に美しいにした所で、絵師風情ふぜいの娘などに、想ひを御懸けになる方ではないと云ふ事を、申し上げて置けば、よろしうございませぬ。

さて良秀の娘は、面目を施して御前を下りましたが、元より伶俐ねたみな女でございませぬから、はしたない外の女房たちの妬ねたみを受けるやうな事もございませぬ。反つてそれ以来、猿と一しよに何かといとしがられまして、取分け御姫様の御側からは御離れ申した事がないと云つてもよろしい位、物見車の御供にもついぞ欠けた事はございませぬでした。

が、娘の事は一先づ措おきまして、これから又親の良秀の事を申し上げませう。成程なるほど猿の方は、かやうに間もなく、皆のものに可愛がられるやうになりましたが、肝腎かんじんの良秀はやはり誰にでも嫌はれて、相不あひかはらず変陰へまへまはつては、猿秀よぼは呼よりをされて居りました。しかもそれが又、御邸の中ばかりではございませぬ。現に横川よがはの僧都様も、良秀と申しますと、魔障にでも御遇ひになつたやうに、顔の色を変へて、御憎み遊ば

しました。(尤もこれは良秀が僧都様の御行状を
戯画ざれゑに描いたからだなどと申しますが、何分下
さまの噂でございますから、確に左様とは申さ
れますまい。) 兎に角、あの男の不評判は、どち
らの方に伺ひましても、さう云ふ調子ばかりで
ございます。もし悪く云はないものがあつたと
致しますと、それは二三人の絵師仲間か、或は
又、あの男の絵を知つてゐるだけで、あの男の
人間は知らないものばかりでございませう。

しかし実際、良秀には、見た所が卑しかつた
ばかりでなく、もつと人に嫌がられる悪い癖が
あつたのでございますから、それも全く自業自
得とでもなすより外に、致し方はございません。

四

その癖と申しますのは、吝嗇りんしやくで、慳貪けんどんで、恥

知らずで、怠けもので、強慾で——いやその中
でも取分け甚しいのは、横柄で高慢で、何時も
本朝第一の絵師と申す事を、鼻の先へぶら下げ
てゐる事でございませう。それも画道の上ばか
りならまだしもでございますが、あの男の負け
惜しみになりますと、世間の習慣ならはしとか慣例しきたりとか
申すやうなものまで、すべて莫迦ばかに致さずには
置かないのでございます。これは永年良秀の弟
子になつてゐた男の話でございますが、或日さ
る方の御邸で名高い檜垣ひがきの巫女みこに御霊ごりやうが憑つ
いて、恐しい御託宣があつた時も、あの男は空耳そらみ
を走らせながら、有合せた筆と墨とで、その巫
女の物凄い顔を、丁寧ていねいに写して居つたとか申し
ました。大方御霊おたゝの御祟まじりも、あの男の眼から
見ましたなら、子供欺し位にしか思はれないの
でございませう。

さやうな男でございますから、吉祥天を描く

時は、卑しい傀儡の顔を写しましたり、不動明王を描く時は、無頼の放免の姿を像りましたり、いろ／＼の勿体ない真似を致しましたが、それでも当人を詰りますと「良秀の描いた神仏が、その良秀に冥罰を当てられるとは、異な事を聞くものぢや」と空嘯いてゐるではございませんか。これには流石の弟子たちも呆れ返つて、中には未来の恐ろしさに、匆々暇をとつたものも、少くなかつたやうに見うけました。——先づ一口に申しましたなら、慢業重畳とでも名づけませうか。兎に角当時天が下で、自分程の偉い人間はないと思つてゐた男でございます。従つて良秀がどの位画道でも、高く止つて居りましたかは、申し上げるまでもございますまい。尤もその絵でさへ、あの男のは筆使ひでも彩色でも、まるで外の絵師とは違つて居りましたから、仲の悪い絵師仲間では、山師だなどと

申す評判も、大分あつたやうでございます。その連中の申しますには、川成とか金岡とか、その外昔の名匠の筆になつた物と申しますと、やれ板戸の梅の花が、月の夜毎に匂つたの、やれ屏風の太宮人が、笛を吹く音さへ聞えたのと、優美な噂が立つてゐるものでございますが、良秀の絵になりますと、何時でも必ず気味の悪い、妙な評判だけしか伝はりません。譬へばあの男が龍蓋寺の門へ描きました、五趣生死の絵に致しまして、夜更けて門の下を通りますと、天人の嘆息をつく音や啜り泣きをする声が、聞えたと申す事でございます。いや、中には死人の腐つて行く臭気を、嗅いだと申すものさへございました。それから大殿様の御云ひつけで描いた、女房たちの似絵なども、その絵に写されたゞけの人間は、三年と尽たない中に、皆魂の抜けたやうな病氣になつて、死んだと申すでは

「ごさいませんか。悪く云ふものに申させますと、それが良秀の絵の邪道に落ちてゐる、何よりの証拠ださうでございます。」

「が、何分前にも申し上げました通り、横紙破りな男でございますから、それが反つて良秀は大自慢で、何時ぞや大殿様が御冗談に、「その方は兎角醜いものが好きと見える。」と仰有つた時も、あの年に似ず赤い唇でにやりと気味悪く笑ひながら、「さやうでござりまする。かいなでの絵師には総じて醜いものゝ美しさなどと申す事は、わからう筈がございませぬ。」と、横柄に御答へ申し上げました。如何に本朝第一の絵師に致せ、よくも大殿様の御前へ出て、そのやうな高言が吐けたものでございます、先刻引合に出しました弟子が、内々師匠に「智羅永寿」と云ふ諱名をつけて、増長慢を譏つて居りましたが、それも無理はございませぬ。御承知でもござい

ませうが、「智羅永寿」と申しますのは、昔震旦から渡つて参りました天狗の名でございます。

しかしこの良秀にさへ——この何とも云ひやうのない、横道者の良秀にさへ、たつた一人間らしい、情愛のある所がございました。

五

と申しますのは、良秀が、あの一人娘の小女房をまるで氣違ひのやうに可愛がつてゐた事でございます。先刻申し上げました通り、娘も至つて氣のやさしい、親思ひの女でございましたが、あの男の子煩惱は、決してそれにも劣りませぬ。何しろ娘の着る物とか、髪飾とかの事と申しますと、どこの御寺の勸進にも喜捨をした事のないあの男が、金銭には更に惜し気もなく、整へてやると云ふのでございますから、嘘

のやうな気が致すではございませんか。

が、良秀の娘を可愛がるのは、唯可愛がるだけ
けで、やがてよい聳をとらうなどと申す事は、
夢にも考へて居りません。それ所か、あの娘へ
悪く云ひ寄るものでもございましたら、反つて
辻冠者つじくわんじやばらでも駆り集めて、暗打位やみうちは喰はせ兼
ねない量見でございます。でございますから、
あの娘が大殿様の御声が、りで、小女房に上り
ました時も、老爺おやぢの方は大不服で、当座の間は
御前へ出ても、苦り切つてばかり居りました。
大殿様が娘の美しいのに御心を惹かされて、親
の不承知なのもかまはずに、召し上げたなどと
申す噂は、大方かやうな容子を見たもの、
当推量あてずるりやうから出たのでございませう。

尤も其噂は嘘でございまして、子煩悩の一
心から、良秀が始終娘の下るやうに祈つて居り
ましたのは確でございます。或時大殿様の御云

ひつけで、稚児ちごもんじゆ文殊を描きました時も、御寵愛
の童わらべの顔を写しまして、見事な出来でございま
したから、大殿様も至極御満足で、

「褒美には望みの物を取らせるぞ。遠慮なく望
め。」と云ふ難有い御言おことばが下りました。すると良
秀は畏まつて、何を申すかと思ひますと、

「何卒私の娘をば御下げ下さいまするやうに。」
と臆面もなく申し上げました。外のお邸ならば
兎も角も、堀河の大殿様の御側に仕へてゐるの
を、如何に可愛いからと申しまして、かやうに
無躰ぶしつけに御暇を願ひますものが、どこの国に居り
ませう。これには大腹中の大殿様も聊いさゝか御機嫌
を損じたと見えまして、暫くは唯、黙つて良秀
の顔を眺めて御居でになりましたが、やがて、
「それはならぬ。」と吐出はきだすやうに仰有ると、急
にその儘御立になつてしまひました。かやうな
事が、前後四五遍もございましたらうか。今に

なつて考へて見ますと、大殿様の良秀を御覧になる眼は、その都度にだんだんと冷やかになつていらしたやうでございます。すると又、それにつけても、娘の方は父親の身が案じられるせゐでゞもございますか、曹司へ下つてゐる時などは、よく桂うづちぎの袖を嚙んで、しくく泣いて居りました。そこで大殿様が良秀の娘に懸想けさうなすつたなどと申す噂が、愈々拡がるやうになつたのでございませう。中には地獄変の屏風の由来も、実は娘が大殿様の御意に従はなかつたからだなどと申すものも居りますが、元よりさやうな事がある筈はございませぬ。

私どもの眼から見ますと、大殿様が良秀の娘を御下げにならなかつたのは、全く娘の身の上を哀れに思召したからで、あのやうに頑かたくなな親の側へやるよりは御邸に置いて、何の不自由なく暮させてやらうと云ふ難有い御考へだつたやう

でございます。それは元より氣立ての優しいあの娘を、御鼻肩になつたのには間違ひございせん。が、色を御好みになつたと申しますのは、恐らく牽強附会けんきやうふくわいの説でございませう。いや、跡方もない嘘と申した方が、宜しい位でございませぬ。

それは兎も角もと致しまして、かやうに娘の事から良秀の御覚えが大分悪くなつて来た時でございます。どう思召したか、大殿様は突然良秀を御召になつて、地獄変の屏風を描くやうにと、御云ひつけなさいました。

六

地獄変の屏風と申しますと、私はもうあの恐ろしい画面の景色が、ありありと眼の前へ浮んで来るやうな氣が致します。

同じ地獄変と申しましても、良秀の描きましたのは、外の絵師のに比べますと、第一図取りから似て居りません。それは一帖の屏風の片隅へ、小さく十王を始め眷属たちの姿を描いて、あとは一面に紅蓮大紅蓮の猛火が劍山刀樹も爛れるかと思ふ程渦を巻いて居りました。でございますから、唐めいた冥官たちの衣裳が、点々と黄や藍を綴つて居ります外は、どこを見ても烈々とした火焰の色で、その中をまるで巾のやうに、墨を飛ばした黒煙と金粉を煽つた火の粉とが、舞ひ狂つて居るのでございます。

こればかりでも、随分人の目を驚かす筆勢でございますが、その上に又、業火に焼かれて、転々と苦しんで居ります罪人も、殆ど一人として通例の地獄絵にあるものはございませぬ。何故かと申しますと良秀は、この多くの罪人の中に、上は月卿雲客から下は乞食非人まで、あ

らゆる身分の人間を写して来たからでございませぬ。束帯のいかめしい殿上人、五つ衣のなまめかしい青女房、珠数をかけた念仏僧、高足駄を穿いた侍学生、細長を着た女の童、幣をかざした陰陽師——一々数へ立て、居りましたら、とても際限はございませぬ。兎に角さう云ふいろく／＼の人間が、火と煙とが逆捲く中を、牛頭馬頭の獄卒に虐まれて、大風に吹き散らされる落葉のやうに、紛々と四方八方へ逃げ迷つてゐるのでございませぬ。鋼叉に髪をからまれて、蜘蛛よりも手足を縮めてゐる女は、神巫の類でもございませうか。手矛に胸を刺し通されて、蝙蝠のやうに逆になつた男は、生受領か何か相違ございませぬ。その外或は鉄の管に打たれるもの、或は千曳の磐石に押されるもの、或は怪鳥の嘴にかけられるもの、或は又毒龍の顎に噛まれるもの——、呵責も亦罪人の数

に応じて、幾通りあるかわかりません。

が、その中でも殊に一つ目立つて凄じく見えるのは、まるで獣の牙のやうな刀樹の頂きを半ばかすめて（その刀樹の梢にも、多くの亡者が纍々と、五体を貫かれて居りましたが）中空から落ちて来る一輛の牛車でございませう。地獄の風に吹き上げられた、その車の簾の中には、女御、更衣にもまがふばかり、綺羅びやかに装つた女房が、丈の黒髪を炎の中になびかせて、白い頸を反らせながら、悶え苦しんで居ります。が、その女房の姿と申し、又燃えしきつてゐる牛車と申し、何一つとして炎熱地獄の責苦を偲ばせないものはございません。云はゞ広い画面の恐ろしさが、この一人の人物に轉つてゐるとも申しませうか。これを見るものゝ耳の底には、自然と物凄い叫喚の聲が伝はつて来るかと疑ふ程、入神の出来映えでございました。

あゝ、これでございませう、これを描くために、あの恐ろしい出来事が起つたのでございませう。又さもなければ如何に良秀でも、どうしてかやうに生々と奈落の苦艱が画かれませう。あの男はこの屏風の絵を仕上げた代りに、命さへも捨てるやうな、無惨な目に出遇ひました。云はゞこの絵の地獄は、本朝第一の絵師良秀が、自分で何時か墜ちて行く地獄だつたのでございませう。……

私はあの珍しい地獄変の屏風の事を申し上げますの急いだあまりに、或は御話の順序を顛倒致したかも知れませう。が、これからは又引き続いて、大殿様から地獄絵を描けと申す仰せを受けた良秀の事に移りませう。

良秀はそれから五六箇月の間、まるで御邸へも伺はないで、屏風の絵にばかりかゝつて居りました。あれ程の子煩悩がいぎ絵を描くと云ふ段になりますと、娘の顔を見る気もなくなると申すのでございますから、不思議なものではございませんか。先刻申し上げました弟子の話では、何でもあの男は仕事にとりかゝりますと、まるで狐でも憑いたやうになるらしいでございます。いや実際当時の風評に、良秀が画道で名を成したのは、福德の大神に祈誓をかけたからで、その証拠にはあの男が絵を描いてゐる所を、そつと物陰ものかげから覗いて見ると、必ず陰々として霊狐の姿が、一匹ならず前後左右に、群つてゐるのが見えるなどと申す者もございました。その位でございいますから、いぎ画筆を取るとなると、その絵を描き上げると云ふより外は、何も彼も忘れてしまふのでございませう。昼も夜も一間

に閉ぢこもつたきりで、滅多に日の目も見た事はございません。——殊に地獄変の屏風を描いた時には、かう云ふ夢中になり方が、甚しかつたやうでございいます。

と申しますのは何もあの男が、昼もしとみ蔭も下した部屋の中で、結燈台ゆひとうだいの火の下に、秘密の絵の具を合せたり、或は弟子たちを、水干やら狩衣やら、さまざまに着飾らせて、その姿を、一人づゝ丁寧ていねいに写したり、——さう云ふ事ではございません。それ位の変つた事なら、別にあの地獄変の屏風を描かなくとも、仕事にかゝつてゐる時ときへ申しますと、何時でもやり兼ねない男なのでございいます。いや、現に龍蓋寺りゅうがいじの五趣生死ごしゆしやうじの図を描きました時などは、当り前の人間なら、わざと眼を外そらせて行くあの往来の屍骸の前へ、悠々と腰を下して、半ば腐れかかった顔や手足を、髪の毛一すぢも違へずに、写

して参つた事がございました。では、その甚しい夢中になり方とは、一体どう云ふ事を申すのか、流石に御わかりにならない方もいらつしやいませう。それは唯今詳しい事は申し上げてゐる暇もございませんが、主な話を御耳に入れますと、大体先かやうな次第なのでございます。

良秀の弟子の一人が（これもやはり、前に申した男でございませう）或日絵の具を溶いて居りますと、急に師匠が参りまして、

「己は少し午睡ひるねをしようと思ふ。がどうもこの頃は夢見が悪い。」とかう申すのでございます。別にこれは珍しい事でも何でもございませんから、弟子は手を休めずに、唯、
「さやうでございませうか。」と一通りの挨拶を致しました。所が、良秀は、何時になく寂しさうな顔をして、

「就いては、己が午睡をしてゐる間中、枕もとに

坐つてゐて貰ひたいのだが。」と、遠慮がましく頼むではございませんか。弟子は何時になく、師匠が夢なぞを気にするのは、不思議だと思ひましたが、それも別に造作のない事でございすから、

「よろしうございます。」と申しますと、師匠はまだ心配さうに、

「では直に奥へ来てくれ。尤も後で外の弟子が来ても、己の睡つてゐる所へは入れないやうに。」と、ためらひながら云ひつけました。奥と申しますのは、あの男が画を描きます部屋で、その日も夜のやうに戸を立て切つた中に、ぼんやりと灯をともしながら、まだ焼筆やきふでで図取りだけしか出来てゐない屏風が、ぐるりと立て廻してあつたさうでございます。さてこゝへ参りますと、良秀は肘を枕にして、まるで疲れ切つた人間のやうに、すやく、睡入つてしまひまし

たが、ものゝ半時とたちません中に、枕もとに居ります弟子の耳には、何とも彼とも申しやうのない、気味の悪い声はいり始めました。

八

それが始めは唯、声でございましたが、暫くしますと、次第に切れぐな語ことばになつて、云はゞ溺れかゝつた人間が水の中で呻うなるやうに、かやうな事を申すのでございます。

「なに、己に来いと云ふのだな。——どこへ——どこへ来いと？ 奈落へ来い。炎熱地獄へ来い。——誰だ。さう云ふ貴様は。——貴様は誰だ。——誰だと思つたら」

弟子は思はず絵の具を溶く手をやめて、恐るく師匠の顔を、覗くやうにして透して見ますと、皺だらけな顔が白くなつた上に大粒おほつぶな汗を

滲にじませながら、唇の干かわいた、齒の疎まばらな口を喘あへぐやうに大きく開けて居ります。さうしてその口の中で、何か糸でもつけて引張つてゐるかと思ふ程、目まぐるしく動くものがあると思ひますと、それがあの男の舌だつたと申すではございませんか。切れ切れない語は元より、その舌から出て来るのでございます。

「誰だと思つたら——うん、貴様だな。己も貴様だらうと思つてゐた。なに、迎へに来たと？ だから来い。奈落へ来い。奈落には——奈落には己の娘が待つてゐる。」

その時、弟子の眼には、朦朧とした異形いぎやうの影が、屏風の面おもてをかすめてむらむらと下りて来るやうに見えた程、気味の悪い心もちが致したさうでございませぬ。勿論弟子はすぐに良秀に手をかけて、力のあらん限り揺り起しましたが、師匠は猶夢現ゆめうつに独り語ごとを云ひつゞけて、容易に眼

のさめる気色はございませぬ。そこで弟子は思ひ切つて、側にあつた筆洗の水を、ぎぶりとあの男の顔へ浴びせかけました。

「待つてゐるから、この車へ乗つて来い——この車へ乗つて、奈落へ来い——」と云ふ語がそれと同時に、喉のどをしめられるやうな呻き声に變つたと思ひますと、やつと良秀は眼を開いて、針で刺されたよりも慌しく、矢庭にそこへ匆はね起きました。が、まだ夢の中の異類いなるゐいぎやう異形が、睚まぶたの後を去らないのでございませう。暫くは唯恐ろしさうな眼つきをして、やはり大きく口を開きながら、空を見つめて居りましたが、やがて我に返つた容子で、

「もう好いから、あちらへ行つてくれ」と、今度は如何にも素そつ気けなく、云ひつけるのでございませぬ。弟子はかう云ふ時に逆ふと、何時でも大小言おほこごとを云はれるので、匆々師匠の部屋から出

て参りましたが、まだ明い外の日の光を見た時には、まるで自分が悪夢から覚めた様な、ほつとした気が致したとか申して居りました。

しかしこれなどはまだよい方なので、その後一月ばかりたつてから、今度は又別の弟子が、わざわざ奥へ呼ばれますと、良秀はやはりうす暗い油火の光りの中で、絵筆を嚙んで居りましたが、いきなり弟子の方へ向き直つて、

「御苦労だが、又裸になつて貫はうか。」と申すのでございませぬ。これはその時までにも、どうかすると師匠が云ひつけた事でございませぬから、弟子は早速衣類をぬぎすて、赤裸あかはだかになりますと、あの男は妙に顔をしかめながら、

「わしは鎖くさりで縛られた人間が見たいと思ふのだが、氣の毒でも暫くの間、わしのする通りになつてゐてはくれまいか。」と、その癖少しも氣の毒らしい容子などは見せずに、冷然とかう申し

ました。元来この弟子は画筆などを握るよりも、太刀でも持った方が好きさうな、逞しい若者でございましたが、これには流石に驚いたと見えて、後々までもその時の話を致しますと、「これは師匠が気が違つて、私を殺すのではないかと思ひました」と繰返して申したさうでございます。が、良秀の方では、相手の愚図々々してゐるのが、燥じれつたくなつて参つたのでございませう。どこから出したか、細い鉄の鎖をざら／＼と手繰たぐりながら、殆ど飛びつくやうな勢ひで、弟子の背中へ乗りかかりますと、否応なしにその儘両腕を捻ぢあげて、ぐる／＼巻きに致してしまひました。さうして又その鎖の端を邪慳じゃけんにぐいと引きましたからたまりません。弟子の体ははづみを食つて、勢よく床ゆかを鳴らしながら、ごろりとそこへ横倒しに倒れてしまつたのでございます。

九

その時の弟子の恰好かつかうは、まるで酒甕を転がしたやうだとも申しませうか。何しろ手も足も惨むごたらしく折り曲げられて居りますから、動くのは唯首ばかりでございませう。そこへ肥つた体中の血が、鎖に循環めぐりを止められたので、顔と云はず胴と云はず、一面に皮膚の色が赤み走つて参るではございませうか。が、良秀にはそれも格別気にならないと見えまして、その酒甕のやうな体のまはりを、あちこちと廻つて眺めながら、同じやうな写真の図を何枚となく描いて居ります。その間、縛られてゐる弟子の身が、どの位苦しかつたかと云ふ事は、何もわざ／＼取り立てゝ申し上げるまでもございませう。が、もし何事も起らなかつたと致しましたら、

この苦しみは恐らくまだその上にも、つゞけられた事でございませう。幸(と申しますより、或は不幸にと申した方がよろしいかも知れません。)暫く致しますと、部屋の隅にある壺の蔭から、まるで黒い油のやうなものが、一すぢ細くうねりながら、流れ出して参りました。それが始の中は余程粘り気のあるものゝやうに、ゆつくり動いて居りましたが、だん／＼滑らかに、^{すべ}迂り始めて、やがてちら／＼光りながら、鼻の先まで流れ着いたのを眺めますと、弟子は思はず、息を引いて、

「蛇が——蛇が。」と喚わめきました。その時は全く体中の血が一時に凍るかと思つたと申しますが、それも無理はございませぬ。蛇は実際もう少しで、鎖の食ひこんである、頸の肉へその冷たい舌の先を触れようとしてゐたのでございませぬ。この思ひもよらない出来事には、いくら横

道な良秀でも、ぎよつと致したのでございませう。慌てて画筆を投げ棄てながら、咄嗟に身をかがめたと思ふと、素早く蛇の尾をつかまへて、ぶらりと逆に吊り下げました。蛇は吊り下げられながらも、頭を上げて、きり／＼と自分の体へ巻つきましたが、どうしてもあの男の手の所まではとどきませぬ。

「おのれ故に、あつたら一筆ひとふでを仕損しそんじたぞ。」良秀は忌々しさうにかう呟くと、蛇はその儘部屋の隅の壺の中へ抛りこんで、それからさも不承無承ふじょうぶじょうに、弟子の体へかゝつてゐる鎖を解いてくれました。それも唯解いてくれたと云ふ丈で、肝腎の弟子の方へは、優しい言葉一つかけてはやりませぬ。大方弟子が蛇に噛まれるよりも、写真の一筆を誤つたのが、業腹ごふはらだつたのでございませう。——後で聞きますと、この蛇もやはり姿を写す為にわざ／＼あの男が飼つてゐた

のださうでございます。

これだけの事を御聞きになつたのでも、良秀の氣違ひじみた、薄氣味の悪い夢中になり方が、略御わかりになつた事でございませう。所が最後に一つ、今度はまだ十三四の弟子が、やはり地獄變の屏風の御かげで、云はゞ命にも関はり兼ねない、恐ろしい目に出遇ひました。その弟子は生れつき色の白い女のやうな男でございしましたが、或夜の事、何気なく師匠の部屋へ呼ばれて参りますと、良秀は燈台の火の下で掌に何やら腥い肉をのせながら、見慣れない一羽の鳥を養つてゐるのでございませう。大きさは先、世の常の猫ほどもございませうか。さう云へば、耳のやうに両方へつき出た羽毛と云ひ、琥珀のやうな色をした、大きな円い眼と云ひ、見た所も何となく猫に似て居りました。

十

元来良秀と云ふ男は、何でも自分のしてゐる事に嘴を入れられるのが大嫌ひで、先刻申し上げた蛇などもさうでございませうが、自分の部屋の中に何があるか、一切さう云ふ事は弟子たちにも知らせた事がございませぬ。でございませうから、或時は机の上に髑髏がのつてゐたり、或時は又、銀の椀や蒔絵の高坏が並んでゐたり、その時描いてゐる画次第で、随分思ひもよらない物が出て居りました。が、ふだんはかやうな品を、一体どこにしまつて置くのか、それは又誰にもわからなかつたさうでございませう。あの男が福德の大神の冥助を受けてゐるなど、申す噂も、一つは確にさう云ふ事が起りになつてゐるのでございませう。

そこで弟子は、机の上のその異様な鳥も、や

はり地獄変の屏風を描くのに入用なのに違ひな
いと、かう独り考へながら、師匠の前へ畏まつ
て、「何か御用でございますか」と、恭々しく申
しますと、良秀はまるでそれが聞えないやうに、
あの赤い唇へ舌なめずりをして、

「どうだ。よく馴れてゐるではないか。」と、鳥
の方へ頤をやりませう。

「これは何と云ふものでございませう。私はつ
いぞまだ、見た事がございませせんが。」

弟子はかう申しながら、この耳のある、猫の
やうな鳥を、気味悪さうにじろじろ眺めますと、
良秀は不相変何時もの嘲笑ふやうな調子で、

「なに、見た事がない？ 都育ちの人間はそれだ
から困る。これは二三日前に鞍馬の獵師がわし
にくれた耳木兔と云ふ鳥だ。唯、こんなに馴れ
てゐるのは、沢山あるまい。」

かう云ひながらあの男は、徐に手をあげて、

丁度餌を食べてしまつた耳木兔の背中の毛を、
そつと下から撫で上げました。するとその途端
でございます。鳥は急に鋭い声で、短く一声啼
いたと思ふと、忽ち机の上から飛び上つて、両
脚の爪を張りながら、いきなり弟子の顔へとび
かゝりました。もしその時、弟子が袖をかざし
て、慌て、顔を隠さなかつたなら、きつともう
疵の一つや二つは負はされて居りましたらう。
あつと云ひながら、その袖を振つて、逐ひ払は
うとする所を、耳木兔は蓋にかかつて、嘴を鳴
らしながら、又一突き——弟子は師匠の前も忘
れて、立つては防ぎ、坐つては逐ひ、思はず狭い
部屋の中を、あちらこちらと逃げ惑ひました。
怪鳥も元よりそれにつれて、高く低く翔りなが
ら、隙さへあれば幕地に眼を目がけて飛んで来
ます。その度にばさくと、凄じく翼を鳴すの
が、落葉の匂だか、滝の水沫とも或は又猿酒の

饜すたいきれだか何やら怪しげなもの、けはひを誘つて、気味の悪さと云つたらございませぬ。

さう云へばその弟子も、うす暗い油火の光さへ朧おぼろげな月明りかと思はれて、師匠の部屋がその儘遠い山奥の、妖気に閉された谷のやうな、心細い気がしたとか申したさうでございます。

しかし弟子が恐しかつたのは、何も耳木兎に襲はれると云ふ、その事ばかりではございませぬ。いや、それよりも一層身の毛がよだつたのは、師匠の良秀がその騒ぎを冷然と眺めながら、徐に紙を展のべ筆を舐ねぶつて、女のやうな少年が異形な鳥に虐あつかまれる、物凄おそろしい有様を写してゐた事でございます。弟子は一目それを見ますと、忽ち云ひやうのない恐ろしさに脅おびかされて、實際一時は師匠の為に、殺されるのではないかとさへ、思つたと申して居りました。

十一

實際師匠に殺されると云ふ事も、全くないとは申されませぬ。現にその晩わざわざ弟子を呼びよせたのでさへ、実は耳木兎を唆けしかけて、弟子の逃げまはる有様を写さうと云ふ魂胆こんたんらしかつたのでございます。でございますから、弟子は、師匠の容子を一目見るが早いから、思はず両袖に頭を隠しながら、自分にも何と云つたかわからないやうな悲鳴をあげて、その儘部屋の隅の遣戸やりどの裾へ、居すくまつてしまひました。とその拍子に、良秀も何やら慌てたやうな声をあげて、立上つた気色でございましたが、忽ち耳木兎の羽音が一層前よりもはげしくなつて、物の倒れる音や破れる音が、けたましく聞えるではございませぬか。これには弟子も二度、度を失つて、思はず隠してゐた頭を上げて見ます

と、部屋の中は何時かまつ暗になつてゐて、師匠の弟子たちを呼び立てる声が、その中で苛立しさうにして居ります。

やがて弟子の一人が、遠くの方で返事をして、それから灯をかざしながら、急いでやつて参りましたが、その煤臭い明りで眺めますと、結燈台が倒れたので、床も畳も一面に油だらけになつた所へ、さつきの耳木兎が片方の翼ばかり、苦しさうにはためかしながら、転げまはつてゐるのでございます。良秀は机の向うで半ば体を起した儘、流石に呆氣にとられたやうな顔をして、何やら人にはわからない事を、ぶつ／＼呟いて居りました。——それも無理ではございません。あの耳木兎の体には、まつ黒な蛇が一匹、頸から片方の翼へかけて、きりきりと捲きついてゐるのでございます。大方これは弟子が居すくまる拍子に、そこにあつた壺をひつ

くり返して、その中の蛇が這ひ出したのを、耳木兎がなまじひに掴みかゝらうとしたばかりに、とう／＼かう云ふ大騒ぎが始まつたのでございませう。二人の弟子は互に眼と眼とを見合せて、暫くは唯、この不思議な光景をぼんやり眺めて居りましたが、やがて師匠に黙礼をして、こそ／＼部屋へ引き下つてしまひました。蛇と耳木兎とがその後どうなつたか、それは誰も知つてゐるものはございません。——

かう云ふ類の事は、その外まだ、幾つとなくございました。前には申し落しましたが、地獄変の屏風を描けと云ふ御沙汰があつたのは、秋の初でございませうから、それ以来冬の末まで、良秀の弟子たちは、絶えず師匠の怪しげな振舞に脅かされてゐた訳でございます。が、その冬の末に良秀は何か屏風の画で、自由に出来ない事が出来たのでございませう、それまでよりは、

一層容子も陰気になり、物云ひも目に見えて、荒々しくなつて参りました。と同時に又屏風の画も、下画が八分通り出来上つた儘、更に抄どる模様はございませぬ。いや、どうかすると今までに描いた所さへ、塗り消してもしまひ兼ねない気色なのでございませぬ。

その癖、屏風の何が自由にならないのだから、それは誰にもわかりませぬ。又、誰もわからうとしたものもございませぬ。前のいろ／＼な出来事に懲りてゐる弟子たちは、まるで虎狼と一つ檻をりにでもゐるやうな心もちで、その後師匠の身のまはりへは、成る可く近づかない算段をして居りましたから。

十二

従つてその間の事に就いては、別に取り立

て、申し上げる程の御話もございませぬ。もし強ひて申し上げると致しましたら、それはあの強情な老爺おやぢが、何故か妙に涙脆もろくなつて、人のみない所では時々独りで泣いてゐたと云ふ御話位なものでございませう。殊に或日、何かの用で弟子の一人が、庭先へ参りました時などは廊下に立つてぼんやり春の近い空を眺めてゐる師匠の眼が、涙で一ぱいになつてゐたさうでございませぬ。弟子はそれを見ますと、反つてこちらが恥しいやうな気がしたので、黙つてこそ／＼引き返したと申す事でございませぬが、五趣生死ごしゆしやうじの図を描く為には、道ばたの屍骸さへ写したと云ふ、傲慢なあゝの男が、屏風の画が思ふやうに描けない位の事で、子供らしく泣き出すなどと申すのは、随分異なものでございませぬか。

所が一方良秀がこのやうに、まるで正氣の間とは思はれない程夢中になつて、屏風の絵を

描いて居ります中に、又一方ではあの娘が、何故かだん／＼気鬱になつて、私どもにさへ涙を堪へてゐる容子が、眼に立つて参りました。それが元来愁顔うれひがほの、色の白い、つゝましやかな女だけに、かうなると何だか睫毛まつげが重くなつて、眼のまはりに隈くまがかゝつたやうな、余計寂しい気が致すのでございます。初はやれ父思ひのせゐだの、やれ恋煩ひをしてゐるからだの、いろ／＼臆測を致したものがございしますが、中頃から、なにあれは大殿様が御意に従はせようとしていらつしやるのだと云ふ評判が立ち始めて、夫それからは誰も忘れた様に、ぱつたりあの娘の噂をしなくなつて了ひました。

丁度その頃の事でございませう。或夜、更かうが闌たけてから、私が独り御廊下を通りかゝりますと、あの猿の良秀がいきなりどこから飛んで参りまして、私の袴の裾を頻りにひつぱるので

ございます、確、もう梅の匂でも致しきうな、うすい月の光のさしてゐる、暖い夜でございしましたが、其明りですかして見ますと、猿はまつ白な歯をむき出しながら、鼻の先へ皺をよせて、気が違はないばかりにけたゝましく啼き立てゝゐるではございせんか。私は気味の悪いのが三分と、新しい袴をひつぱられる腹立たしさが七分とで、最初は猿を蹴放して、その儘通りすぎようかとも思ひましたが、又思ひ返して見ますと、前にこの猿を折檻して、若殿様の御不興を受けた侍さむらいの例もございます。それに猿の振舞が、どうも唯事とは思はれません。そこでどう／＼私も思ひ切つて、そのひつぱる方へ五六間歩くともなく歩いて参りました。

すると御廊下が一曲り曲つて、夜目にもうす白い御池の水が枝ぶりのやさしい松の向うにひろ／＼と見渡せる、丁度そこ迄参つた時の事で

ございます。どこか近くの部屋の中で人の争つてゐるらしいけはひが、慌しく、又妙にひつそりと私の耳を脅しました。あたりはどこも森と静まり返つて、月明りとも霽ともつかないものゝ中で、魚の跳る音がする外は、話し声一つ聞えません。そこへこの物音でございますから。私は思はず立止つて、もし狼藉者でもあつたなら、目にも物を見せてくれようと、そつとその遣戸の外へ、息をひそめながら身をよせました。

十三

所が猿は私のやり方がまだるかつたのでございませう。良秀はさもさもどかしさうに、二度私の足のまはりを駈けまはつたと思ひますと、まるで咽を絞められたやうな声で啼きなが

ら、いきなり私の肩のあたりへ一足飛に飛び上りました。私は思はず頸を反らせて、その爪にかけられまいとする、猿は又水干の袖にかじりついて、私の体から迂り落ちまいとする、——その拍子に、私はわれ知らず二足三足よろめいて、その遣り戸へ後ざまに、したゝか私の体を打ちつけました。かうなつてはもう一刻も躊躇してゐる場合ではございませぬ。私は矢庭に遣り戸を開け放して、月明りのとどかない奥の方へ跳りこまうと致しました。が、その時私の眼を遮つたものは——いや、それよりもつと私は、同時にその部屋の中から、弾かれたやうに駈け出さうとした女の方に驚かされました。女は出合頭に危く私に衝き当らうとして、その儘外へ転び出しましたが、何故かそこへ膝をついて、息を切らしながら私の顔を、何か恐ろしいものでも見るやうに、戦きく見上げてゐるのでござ

います。

それが良秀の娘だったことは、何もわざわざ申し上げるまでもございますまい。が、その晩のあの女は、まるで人間が違つたやうに、生々と私の眼に映りました。眼は大きくかゞやいて居ります。頬も赤く燃えて居りましたらう。そこへしどけなく乱れた袴や袴うちぎが、何時もの幼さとは打つて変つた艶なまめかしささへも添へてをります。これが實際あの弱々しい、何事にも控へ目勝な良秀の娘でございませうか。——私は遣り戸に身を支へて、この月明りの中にある美しい娘の姿を眺めながら、慌しく遠のいて行くもう一人の足音を、指させるものゝやうに指さして、誰ですと静に眼で尋ねました。

すると娘は唇を噛みながら、黙つて首をふりました。その容子が如何にも亦、口惜くやしさうなのでございます。

そこで私は身をかゞめながら、娘の耳へ口をつけるやうにして、今度は「誰です」と小声で尋ねました。が、娘はやはり首を振つたばかりで、何とも返事を致しません。いや、それと同時に長い睫毛まつげの先へ、涙を一ぱいためながら、前よりも緊かたく唇を噛みしめてゐるのでございます。

性得しやうとく 愚おろかな私には、分りすぎてゐる程分つてゐる事の外は、生憎あいにく何一つ呑みこめません。でございませうから、私は言ことばのかけやうも知らないで、暫くは唯、娘の胸の動悸に耳を澄ませるやうな心もちで、ぢつとそこに立ちすくんで居りました。尤もこれは一つには、何故かこの上問ひ訊たづすのが悪いやうな、氣咎めが致したからでございませう。——

それがどの位続いたか、わかりませんが、やがて明け放した遣り戸を閉しながら少しは上気さの褪さめたらしい娘の方を見返つて、「もう曹司

へ御帰りなさい」と出来る丈やさしく申しました。さうして私も自分ながら、何か見てはならないものを見たやうな、不安な心もちに脅されて、誰にともなく恥しい思ひをしながら、そつと元来た方へ歩き出しました。所が十歩と歩かない中に、誰か又私の袴の裾を、後から恐るく、引き止めるではございませんか。私は驚いて、振り向きました。あなた方はそれが何だつたと思召しますか？

見るとそれは私の足もとにあの猿の良秀が、人間のやうに両手をついて、黄金の鈴を鳴しながら、何度となく丁寧^{ていねい}に頭を下げてゐるのでございました。

十四

するとその晩の出来事があつてから、半月ば

かり後の事でございます。或日良秀は突然御邸へ参りまして、大殿様へ直^{ちぢき}の御眼通りを願ひました。卑しい身分のものでございますが、日頃から格別御意に入つてゐたからでございませう。誰にでも容易に御会ひになつた事のない大殿様が、その日も快く御承知になつて、早速御前近くへ御召しになりました。あの男は例の通り、香染めの狩衣に萎^なえた烏帽子を頂いて、何時もよりは一層氣むづかしさうな顔をしながら、恭しく御前へ平伏致しましたが、やがて噎^{しはが}れた声で申しますには

「兼ねぐ御云ひつけになりました地獄変の屏風でございりますが、私も日夜に丹誠^{ぬぎ}を抽^ぬんで、筆を執りました甲斐が見えまして、もはやあらまは出来上つたのも同前でございしまする。」

「それは目出度い。予も満足ぢや。」

しかしかう仰^{おつしや}有る大殿様の御声には、何故^{なぜ}か

妙に力の無い、張合のぬけた所がございました。「いえ、それが一向日出度くはござりませぬ。」良秀は、稍腹立しさうな容子で、ぢつと眼を伏せながら、「あらましは出来上りましたが、唯一つ、今以て私には描けぬ所がござりまする。」

「なに、描けぬ所がある？」

「さやうでござりまする。私は総じて、見たものでなければ描けませぬ。よし描けても、得心が参りませぬ。それでは描けぬも同じ事でござりませぬか。」

これを御聞きになると、大殿様の御顔には、嘲るやうな御微笑が浮びました。

「では地獄変の屏風を描かうとすれば、地獄を見なければなるまいな。」

「さやうでござりまする。が、私は先年大火事がござりました時に、炎熱地獄の猛火にもまがふ火の手を、眼のあたりに眺めました。「よぢり不

動」の火焰を描きましたのも、実はあの火事に遇つたからでござりまする。御前もあの絵は御承知でございませう。」

「しかし罪人はどうぢや。獄卒は見た事があるまいな。」大殿様はまるで良秀の申す事が御耳にはいらなかつたやうな御容子で、かう畳みかけて御尋ねになりました。

「私は鉄の鎖に縛られたものを見た事がござりまする。怪鳥に悩まされるものゝ姿も、具に写しとりました。されば罪人の呵責に苦しむ様も知らぬと申されませぬ。又獄卒は——」と云つて、良秀は気味の悪い苦笑を洩しながら、「又獄卒は、夢現に何度となく、私の眼に映りました。或は牛頭、或は馬頭、或は三面六臂の鬼の形が、音のせぬ手を拍き、声の出ぬ口を開いて、私を虐みに参りますのは、殆ど毎日毎夜のことと申してもよろしうございませう。——私の描

かうとして描けぬのは、そのやうなものではございませぬ。」

それには大殿様も、流石に御驚きになつたでございませう。暫くは唯苛いらだ立たしさうに、良秀の顔を睨めて御出になりましたが、やがて眉を険しく御動かしになりながら、

「では何が描けぬと申すのぢや。」と打捨るやうに仰有いました。

十五

「私は屏風の唯中に、檳榔毛びらうげの車が一輛空から落ちて来る所を描かうと思つて居ります。」良秀はかう云つて、始めて鋭く大殿様の御顔を眺めました。あの男は画の事と云ふと、氣違ひ同様になるとは聞いて居りましたが、その時の眼のくばりには確にさやうな恐ろしさがあつたやう

でございます。

「その車の中には、一人のあでやかな上臈が、猛火の中に黒髪を乱しながら、悶え苦しんでゐるのでございませう。顔は煙に烟むせびながら、眉を顰ひそめて、空ざまに車蓋やかたを仰いで居りませう。手は下簾したすだれを引きちぎつて、降りかゝる火の粉の雨を防がうとしてゐるかも知れませぬ。さうしてそのまはりには、怪しげな鷺鳥くちばしが十羽となく、二十羽となく、嘴くちばしを鳴らして紛々と飛び繞めぐつてゐるのでございませう。——あゝ、それが、その牛車の中の上臈が、どうしても私には描けませぬ。」

「さうして——どうぢや。」

大殿様はどう云ふ訳か、妙に悦ばしさうな御氣色で、かう良秀を御促しになりました。が、良秀は例の赤い唇を熱でも出た時のやうに震はせながら、夢を見てゐるのかと思ふ調子で、

「それが私には描けませぬ。」と、もう一度繰返しましたが、突然噛みつくやうな勢ひになつて、「どうか檳榔毛の車を一輛、私に見てゐる前で、火をかけて頂きたうございませぬ。さうしても出来ませぬならば——」

大殿様は御顔を暗くなすつたと思ふと、突然けたたましく御笑ひになりました。さうしてその御笑ひ声に息をつまらせながら、仰有いますには、

「おゝ、万事その方が申す通りに致して遣はさう。出来る出来ぬの詮議は無益むやくの沙汰ぢや。」

私はその御言を伺ひますと、虫の知らせか、何となく凄じい気が致しました。実際又大殿様の御容子も、御口の端には白く泡がたまつて居りますし、御眉のあたりにはびく／＼と電いなづまが走つて居りますし、まるで良秀のもの狂ひに御染みなすつたのかと思ふ程、唯ならなかつたので

ございませぬ。それがちよいと言を御切りになると、すぐ又何かが爆はぜたやうな勢ひで、止め度なく喉を鳴らして御笑ひになりながら、

「檳榔毛の車にも火をかけよう。又その中にはあでやかな女を一人、上臈よそほひの装をさせて乗せて遣はさう。炎と黒煙とに攻められて、車の中の女が、悶え死をする——それを描かうと思ひついたのは、流石に天下第一の絵師ぢや。褒めてとらす。おゝ、褒めてとらすぞ。」

大殿様の御言葉を聞きますと、良秀は急に色を失つて喘あへぐやうに唯、唇ばかり動して居りましたが、やがて体中の筋が緩んだやうに、べたりと畳へ両手をつくと、

「難有い仕合でございませぬ。」と、聞えるか聞えないかわからない程低い声で、丁寧に御礼を申し上げました。これは大方自分の考へてゐた目ろみの恐ろしさが、大殿様の御言葉につれて

ありくと目の前へ浮んで来たからでございませうか。私は一生の中に唯一度、この時だけは良秀が、気の毒な人間に思はれました。

十六

それから二三日した夜の事でございませう。大殿様は御約束通り、良秀を御召しになつて、檣榔毛の車の焼ける所を、目近く見せて御やりになりました。尤もこれは堀河の御邸であつた事ではございませぬ。俗に雪解ゆきげの御所と云ふ、昔大殿様の妹君がいらした洛外の山荘で、御焼きになつたのでございませぬ。

この雪解の御所と申しますのは、久しくどなたも御住ひにはならなかつた所で、広い御庭も荒れ放題荒れ果てて居りましたが、大方この人氣のない御容子を拝見した者の当推量でござい

ませう。こゝで御歿おなくなりになつた妹君の御身の上にも、兎角の噂が立ちまして、中には又月のない夜毎々々に、今でも怪しい御袴おんはかまの緋の色が、地にもつかず御廊下を歩むなどと云ふ取沙汰を致すものもございませぬ。——それも無理ではございませぬ。昼でさへ寂しいこの御所は、一度日が暮れたとなりますと、遣り水みやの音が一際陰ひときはに響いて、星明りに飛ぶ五位鷲も、怪形けぎやうの物かと思ふ程、氣味が悪いのでございませぬから。

丁度その夜はやはり月のない、まつ暗な晩でございませぬが、大殿油おほとのあぶらの灯影で眺めますと、縁なほしに近く座を御占めになつた大殿様は、浅黄の直衣なほしに濃い紫の浮紋うきもんの指貫さしぬきを御召しになつて、白地の錦の縁をとつた円座わらふだに、高々とあぐらを組んでいらつしやいました。その前後左右に御側の者どもが五六人、恭しく居並んで居りまし

たのは、別に取り立てて申し上げるまでもござ
いますまい。が、中に一人、眼だつて事ありげ
に見えたのは、先年陸奥の戦ひに餓ゑて人の肉
を食つて以来、鹿の生角さへ裂くやうになつた
と云ふ強力がうりきの侍が、下に腹巻を着こんだ容子で、
太刀を鷗尻かもめじりに佩はき反そらせながら、御縁の下に厳
しくつくばつてゐた事でございます。——それ
が皆、夜風に靡なびく灯の光で、或は明るく或は暗
く、殆ど夢現ゆめうつを分たない気色で、何故かもの凄
く見え渡つて居りました。

その上に又、御庭に引き据ゑた檳榔毛べいろうげの車が、
高い車蓋やかたにのつしりと暗やみを抑へて、牛はつけず
黒い轆ながえを斜しちに榻しちへかけながら、金物かなものの黄金きんを星
のやうに、ちらちら光らせてゐるのを眺めます
と、春とは云ふものゝ何となく肌寒い気が致し
ます。尤もその車の内は、浮線綾うせんあやの縁ふちをとつた
青い簾はこが、重く封じこめて居りますから、軒はこに

は何がはいつてゐるか判りません。さうしてそ
のまはりには仕丁たちが、手ん手に燃えさかる
松明まつを執つて、煙が御縁の方へ靡くのを気にし
ながら、仔細しさいらしく控へて居ります。

当の良秀は稍や離れて、丁度御縁の真向まへむかひに、跪
いて居りましたが、これは何時もの香染めらし
い狩衣かじゆいに菱なえた揉烏帽子もみかぶとを頂いて、星空の重み
に圧されたかと思ふ位、何時もよりは猶小さく、
見すぼらしげに見えました。その後のちに又一人、
同じやうな烏帽子狩衣うづくまの蹲うづくまつたのは、多分召し
連れた弟子の一人でもございませうか。それ
が丁度二人とも、遠いうす暗がりの中に蹲つて
居りますので、私のゐた御縁の下からは、狩衣
の色さへ定かにはわかりません。

時刻は彼是真夜中にも近かつたでございませう。林泉をつゝんだ暗がひつそりと声を呑んで、一同のする息を窺つてゐると思ふ中には、唯かすかな夜風の渡る音がして、松明の煙がその度に煤臭い匂を送つて参ります。大殿様は暫く黙つて、この不思議な景色をぢつと眺めていらつしやいましたが、やがて膝を御進めになりますと、

「良秀、」と、鋭く御呼びかけになりました。

良秀は何やら御返事を致したやうでございますが、私の耳には唯、唸るやうな声しか聞えて参りません。

「良秀。今宵はその方の望み通り、車に火をかけて見せて遣はさう。」

大殿様はかう仰有つて、御側の者たちの方を流し眇ながに御覧になりました。その時何か大殿様と御側の誰彼との間には、意味ありげな微笑が

交されたやうにも見うけましたが、これは或は私の氣のせみかも分りません。すると良秀は畏おそる畏る頭を挙げて御縁の上を仰いだらしうございしますが、やはり何も申し上げずに控へて居ります。

「よう見い。それは予が日頃乗る車ぢや。その方も覚えがあらう。——予はその車にこれから火をかけて、目のあたりに炎熱地獄を現せさせる心算ぢやが。」

大殿様は又言を御止めになつて、御側の者たちに胸めくぼせをなさいました。それから急に苦々しい御調子で、「その内には罪人の女房が一人、縛いましめた儘、乗せてある。されば車に火をかけたら、必定その女めは肉を焼き骨を焦して、四苦八苦の最期を遂げるであらう。その方が屏風を仕上げるには、又とないよい手本ぢや。雪のやうな肌が燃え爛たれるのを見のがすな。黒髪が火の粉

になつて、舞ひ上るさまもよう見て置け。」

大殿様は三度口を御噤おつぐみになりましたが、何を御思ひになつたのか、今度は唯肩を揺つて、声も立てずに御笑ひなさりながら、

「末代までもない観物ぢや。予もここで見物しよう。それく、簾みすを揚げて、良秀に中の女を見せて遣さぬか。」

仰おほせを聞くと仕丁の一人は、片手に松明まつの火を高くかざしながら、つかくくと車に近づくと、矢庭に片手をさし伸ばして、簾をさらりと揚げて見せました。けたましく音を立てて燃える松明の光は、一しきり赤くゆらぎながら、忽ち狭い軒はこの中を鮮かに照し出しましたが、軀とこの上に惨むじたらしく、鎖にかけられた女房は——あゝ、誰か見違へを致しませう。きらびやかな繡ぬいのあゝる桜の唐衣からぎぬにすべらかし黒髪が艶やかに垂れて、うちかたむいた黄金の釵さいし子も美しく輝いて

見えましたが、身なりこそ違へ、小造りな体つきは、色の白い頸うなじのあたりは、さうしてあの寂しい位つゝましやかな横顔は、良秀の娘に相違ございません。私は危く叫び声を立てようと致しました。

その時でございます。私と向ひあつてゐた侍は慌あわたしく身を起して、柄頭つかがしらを片手に抑へながら、屹きつと良秀の方を睨みました。それに驚いて眺めますと、あの男はこの景色に、半ば正氣を失つたのでございませう。今まで下に蹲うづくまつてゐたのが、急に飛び立つたと思ひますと、両手を前へ伸した儘、車の方へ思はず知らず走りかゝらうと致しました。唯生憎前にも申しました通り、遠い影の中に居りますので、顔貌かほかたちははつきりと分りません。しかしさう思つたのはほんの一瞬間で、色を失つた良秀の顔は、いや、まるで何か目に見えない力が、宙へ吊り上げたやうな

良秀の姿は、忽ちうす暗がり切り抜いてあり
くくと眼前へ浮び上りました。娘を乗せた檣榔
毛の車が、この時、「火をかけい」と云ふ大殿様
の御言と共に、仕丁たちが投げる松明の火を浴
びて炎々と燃え上つたのでございます。

十八

火は見るくくの中に、車蓋やかたをつゝみました。庇ひさし
についた紫の流蘇ふすぎが、煽られたやうにさつと靡
くと、その下から濛々と夜目にも白い煙が渦を
巻いて、或は簾すだれ、或は袖、或は棟むねの金物かなものが、一時
に碎けて飛んだかと思ふ程、火の粉が雨のやう
に舞ひ上る——その凄じさと云つたらございま
せん。いや、それよりもめらめらと舌を吐いて
袖格子そでがうしに搦からみながら、半空なかぞらまでも立ち昇る烈々
とした炎の色は、まるで日輪が地に落ちて、

てんくわ ほとぼし
天火が迸つたやうだとても申しませうか。前に
危く叫ばうとした私も、今は全く魂たましひを消して、
唯茫然と口を開きながら、この恐ろしい光景を
見守るより外はございませんでした。しかし親
の良秀は——

良秀のその時の顔つきは、今でも私は忘れま
せん。思はず知らず車の方へ駆け寄らうとした
あの男は、火が燃え上ると同時に、足を止めて、
やはり手をさし伸した儘、食ひ入るばかりの眼
つきをして、車をつゝむ焰煙を吸ひつけられた
やうに眺めて居りましたが、満身に浴びた火の
光で、皺だらけな醜い顔は、髭の先までもよく
見えます。が、その大きく見開いた眼の中と云
ひ、引き歪めた唇のあたりと云ひ、或は又絶え
ず引き攣つつてゐる頬の肉の震ふるへと云ひ、良秀の
心に交々往来する恐れと悲しみと驚きとは、
歴々と顔に描かれました。首を刎はねられる前の

盗人でも、乃至は十王の庁へ引き出された、十逆五悪の罪人でも、あゝまで苦しきうな顔を致しますまい。これには流石にあの強力がうりきの侍でさへ、思はず色を変へて、畏るゝ大殿様の御顔を仰ぎました。

が、大殿様は緊かたく唇を御噛みになりながら、時々気味悪く御笑ひになつて、眼も放さずぢつと車の方を御見つめになつていらつしやいます。さうしてその車の中には——あゝ、私はその時、その車にどんな娘の姿を眺めたか、それを詳しく申し上げる勇氣は、到底あらうとも思はれません。あの煙に咽むせんで仰あふむ向けた顔の白さ、焰はらを掃つてふり乱れた髪かみの長さ、それから又見る間に火と変つて行く、桜からぎぬの唐衣からぎぬの美しさ、——何と云ふ惨むじたらしい景色でございましたらう。殊ひとおろに夜風が一下して、煙が向うへ靡いた時、赤い上に金粉まを撒いたやうな、焰の中から

浮き上つて、髪を口に噛みながら、縛いましめの鎖も切れるばかり身悶えをした有様は、地獄の業苦を目のあたりへ写し出したかと疑はれて、私始め強力がうりきの侍までおのづと身の毛がよだちました。

するとその夜風が又一渡り、御庭の木々の梢にさつと通ふ——と誰でも、思ひましたらう。さう云ふ音が暗い空を、どことも知らず走つたと思ふと、忽ち何か黒いものが、地にもつかず宙にも飛ばず、鞆まりのやうに躍りながら、御所の屋根から火の燃えさかる車の中へ、一文字にとびこみました。さうして朱塗のやうな袖格子が、ばらばらと焼け落ちる中に、のけ反ぞつた娘の肩を抱いて、帛きぬを裂くやうな鋭い声を、何とも云へず苦しきうに、長く煙の外へ飛ばせました。続いて又、二声三声——私たちは我知らず、あつと同音に叫びました。壁代かべしろのやうな焰を後にして、娘の肩すがに縋つてゐるのは、堀河の御邸

に繋いであつた、あの良秀と諱名あだなのある、猿だつたのでございますから。その猿が何処をどうしてこの御所まで、忍んで来たか、それは勿論誰にもわかりません。が、日頃可愛がつてくれた娘なればこそ、猿も一しよに火の中へはひつたのでございませう。

十九

が、猿の姿が見えたのは、ほんの一瞬間でございまして。金梨子地きんなしぢのやうな火の粉が一しきり、ぱつと空へ上つたかと思ふ中に、猿は元より娘の姿も、黒煙の底に隠かくされて、御庭のまん中には唯、一輛の火の車が凄すさまじい音を立てながら、燃え沸たぎつてゐるばかりでございませう。いや、火の車と云ふよりも、或は火の柱と云つた方が、あの星空を衝いて煮え返る、恐ろしい火焰の有

様にはふさはしいかも知れませぬ。

その火の柱を前にして、凝り固まつたやうに立つてゐる良秀は、——何と云ふ不思議な事ことでございませう。あのさつきまで地獄の責せめ苦くに悩んでゐたやうな良秀は、今は云ひやうのない輝きを、さながら恍惚とした法悦の輝きを、皺だらけな満面に浮べながら、大殿様の御前も忘れたのか、両腕をしつかり胸に組んで、佇たふんでゐるではございませぬか。それがどうもあの男の眼の中には、娘の悶え死ぬ有様が映つてゐないやうなのでございませぬ。唯美しい火焰の色と、その中に苦しむ女人の姿とが、限りなく心を悦ばせる——さう云ふ景色に見えました。

しかも不思議なのは、何もあの男が一人娘の断末魔を嬉しさに眺めてゐた、そればかりではございませぬ。その時の良秀には、何故か人間とは思はれない、夢に見る獅子王の怒りに似

た、怪しげな厳おごそかさがございました。でございませうから不意の火の手に驚いて、啼き騒ぎながら飛びまはる数の知れない夜鳥でさへ、気のせりか良秀の揉烏帽子のまはりへは、近づかなかつたやうでございます。恐らくは無心の鳥の眼にも、あの男の頭の上に、円光の如く懸つてゐる、不可思議な威厳が見えたのでございませう。

鳥でさへさうでございます。まして私たちは仕丁までも、皆息をひそめながら、身の内も震へるばかり、異様な随喜の心に充ち満ちて、まるで開眼の仏でも見るやうに、眼も離さず、良秀を見つめました。空一面に鳴り渡る車の火と、それに魂を奪はれて、立ちすくんでゐる良秀と——何と云ふ莊嚴、何と云ふ歡喜でございませう。が、その中でたつた、御縁の上の大殿様だけは、まるで別人かと思はれる程、御顔の色も青ざめて、口元に泡を御ためになりながら、

紫の指貫さしぬぎの膝を両手にしつかり御つかみになつて、丁度喉の渴いた獣のやうに喘あへぎつゞけていらつしやいました。……

二十

その夜雪解の御所で、大殿様が車を御焼きになつた事は、誰の口からもなく世上へ洩れましたが、それに就いては随分いろ／＼な批判を致すものも居つたやうでございます。先第一まづに何故なぜ大殿様が良秀の娘を御焼き殺しなすつたか、——これは、かなはぬ恋の恨みからなすつたのだと云ふ噂が、一番多うございました。が、大殿様の思召しは、全く車を焼き人を殺してまでも、屏風の画を描かうとする絵師根性の曲よこしまなものを懲らす御心算おつもりだつたのに相違ちがひございません。現に私は、大殿様が御口づからさう仰有おっしゃる

のを伺つた事さへございます。

それからあの良秀が、目前で娘を焼き殺されながら、それでも屏風の画を描きたいと云ふその木石のやうな心もちが、やはり何かとあげつらはれたやうでございます。中にはあの男を罵つて、画の為には親子の情愛も忘れてしまふ人面獸心の曲者だなどと申すものもございました。あの横川の僧都様などは、かう云ふ考へに味方をなすつた御一人で、「如何に一芸一能に秀でやうとも、人として五常を弁へねば、地獄に墮ちる外はない」などと、よく仰有つたものでございます。

所がその後一月ばかり経つて、愈々地獄變の屏風が出来上りますと良秀は早速それを御邸へ持つて出て、恭しく大殿様の御覽に供へました。丁度その時は僧都様も御居合はせになりましたが、屏風の画を一目御覽になりますと、流石に

あの一帖の天地に吹き荒んでゐる火の嵐の恐しさに御驚きなすつたのでございませう。それまでは苦い顔をなさりながら、良秀の方をじろく睨めつけていらしたのが、思はず知らず膝を打つて、「出かし居つた」と仰有いました。この言を御聞きになつて、大殿様が苦笑なすつた時の御容子も、未だに私は忘れません。

それ以来あの男を悪く云ふものは、少くとも御邸の中だけでは、殆ど一人もゐなくなりました。誰でもあの屏風を見るものは、如何に日頃良秀を憎く思つてゐるにせよ、不思議に厳かな心もちに打たれて、炎熱地獄の大苦艱を如実に感じるからでもございませうか。

しかしさうなつた時分には、良秀はもうこの世に無い人の数にはいつて居りました。それも屏風の出来上つた次の夜に、自分の部屋の梁へ縄をかけて、縊れ死んだのでございます。一人

娘を先立てたあの男は、恐らく安閑として生きながらへるのに堪へなかつたのでございませう。屍骸は今でもあの男の家の跡に埋まつて居ります。尤も小さな標しるしの石は、その後何十年かの雨風あめかぜに曝さらされて、とうの昔誰の墓とも知れないやうに、苔蒸こけむしてゐるにちがひございませぬ。

——大正七年四月——